

良性子宮摘出術後の静脈血栓塞栓症に対する手術時間の影響

Effect of length of surgery on the incidence of venous thromboembolism after benign hysterectomy

Moulder JK et al

Am J Obstet Gynecol 224:364.e1-364.e7, 2021

背景 静脈血栓塞栓症は、術後に罹患し、術後死亡を引き起こす。現在の静脈血栓塞栓症リスク評価ツールは、婦人科患者では検証されておらず、手術時間や子宮摘出のアプローチによるリスクが組み込まれていない。

目的 本研究は、子宮摘出後30日以内の静脈血栓塞栓症に対する手術時間の影響を判断し、年齢、肥満度指数、および摘出方法で違いが存在するかどうかを判断することを目的とした。

方法 American College of Surgeons National Surgical Quality Improvement Program を利用し、前向きに収集されたデータの分析を行った。本データベースには、500以上の病院から集められた、統計および周術期の情報、術後30日間の転帰などが含まれている。2014～2017年に腹式、腔式、腹腔鏡下で良性疾患の子宮摘出術を受けた患者を分析し、静脈血栓塞栓症の発症率について手術時間、年齢、肥満度指数、外科的アプローチによって層別化し、比較した。

結果 期間中、70,606人が対象となった。術後30日

間の静脈血栓塞栓症の発症率は0.4% (n=259)であった。子宮摘出のアプローチは、11,641人が腔式、41,557人が腹腔鏡、17,408人が腹式であった。手術時間が60分増加するごとに、静脈血栓塞栓症のオッズが35%増加した〔調整オッズ比(OR)1.35, 95%信頼区間(CI)1.25～1.45〕。それぞれの外科的アプローチにおける手術時間の60分増加あたりの静脈血栓塞栓症のオッズは、腹腔鏡(調整OR1.20, 95%CI1.05～1.38)、腔式(調整OR1.27, 95%CI0.97～1.66)、および腹式(調整OR1.49, 95%CI1.35～1.65)で最大であった。

結論 手術時間の60分ごとの増加は、子宮摘出から30日以内の静脈血栓塞栓症のオッズの35%の増加と独立して関連しており、このリスクは累積的であった。低侵襲子宮摘出術は、腹部子宮摘出術よりも静脈血栓塞栓症のオッズが低かった。

(愛知医科大学産婦人科学講座 岡本知士 抄)

BRCA1/2 変異女性の経口避妊薬使用と卵巣癌発症リスク：国際的コホート研究での検討

Oral contraceptive use and ovarian cancer risk for *BRCA1/2* mutation carriers : an international cohort study.

Schrijver LH et al : Epidemiological Study of Familial Breast Center et al

Am J Obstet Gynecol S0002-9378(21)00038-7, 2021, Online ahead of print.

背景・目的 *BRCA1/2* 変異をもつ女性の経口避妊薬の長期服用が卵巣癌リスクを低減させるという報告は今までにある。一般的な女性の経口避妊薬服用が卵巣癌リスクを約50%低減させるという報告は多くあるが、*BRCA* 変異をもつ女性においてのリスク低減は潜在的な交絡因子やサンプルサイズが小さい場合が多い。加えて、経口避妊薬の使用期間、最後に内服してからの期間、内服し始めた年代に関する報告は少ない。今回の研究は、より詳細であることと、予防の目的のために行った。

対象・方法 ヨーロッパの18～80歳の女性を対象とし、2/3以上はイギリス、アイルランド、フランス、オランダの研究機関からの情報をもとに解析を行った。また、*BRCA1/2* の両方の変異をもつ女性と、1920年以前に出生した女性は除外した。

結果 経口避妊薬の使用率は、*BRCA1* 変異女性の卵巣癌発症群で58.6%、非発症群で88.9%だった。また、*BRCA2* 変異女性においては発症群で53.5%、非発症群で80.7%だった。卵巣癌発症群では経口避妊薬使用期

間の中央値は *BRCA1* および *BRCA2* 変異女性ともに7年、非発症群では *BRCA1* 変異女性で9年、*BRCA2* 変異女性で8年だった。*BRCA1* 変異女性の単変量解析で、経口避妊薬の長期使用と最近の使用が卵巣癌リスクと負の相関を示した。多変量解析では、使用期間5年未満群に対するハザード比は5～9年群0.67(95%信頼区間(CI)0.40～1.12)、10年以上群0.37(95%CI0.19～0.73)であり、経口避妊薬使用期間が卵巣癌発症の有意な防御因子だということがわかった。経口避妊薬使用期間と卵巣癌リスクの負の相関は15年以上持続し、使用期間が10年以上で、最後に内服してからの期間が15年未満群のハザード比は0.24(95%CI0.14～0.43)、15年以上群では0.56(95%CI0.18～0.59)だった。

結論 *BRCA1* 変異をもつ女性において、経口避妊薬を使用することが卵巣癌のリスク低減につながり、また長期内服が予防となることがわかった。

(愛知医科大学産婦人科学講座 斉藤拓也 抄)